

〔解説〕 事業の参加者に見えない部分を学ぶ

御五神島無人島体験事業は、その名のとおりに無人島での生活という非日常の体験を子どもたちにさせることを目的としている。中島氏の説明にもあるように、「何もない中でいかに生きていくか」という無人島での生活体験は、安心・安全な環境下である普段の家庭生活に比べて、子どもたちにとっては全く未知の世界である。こういった、普段の生活からは遠くかけ離れた過酷な環境という、困難を乗り越えるという体験こそが重要なのである。

この無人島体験事業での地域実習は、学生にとって次のような意味がある。そもそも、こういった無人島での生活をするそのものもまた、大半の学生は経験がなく、貴重な体験となりうることは当然考えられる。事業の中では、全くの他人との交流に加え、火おこしや魚釣りといった日常的には行わない体験ができる。青少年教育という点から考えれば、この事業の対象者は、参加者である子どもたちだけではない。

しかし、学生はこれに加えて、ある程度しか整備されていない自然環境（しかもその整備は、学生も行う可能性があることが、中島氏の説明において示唆されている）で行う事業に、実習生として関わることになる。このことは、学生にとっては参加者として行くよりも重要である。例えば、事業の中心が子どもたちである以上、事業では細心の注意を払った事前準備がなされているが、これは参加者である子どもた

ちには見えない動きである。今後学生が社会に出ていく前に、準備段階から無人島に同行し、プロジェクトを成功させるまでの過程に携わることに、体験的に学ぶという地域実習の目的が果たされることになると考えられる。

また、協働についても、学生にとっては現場で学ぶ貴重な機会となる。中島氏によると、無人島体験事業は、愛媛県教育委員会及びえひめ子どもチャレンジ支援機構を中心に、指導者やスタッフとなる教員の派遣を愛媛県全体で募ったり、地元の国立大学の学生も補佐役として携わったりするなど、多くの組織・団体が関わることで成り立っている。所属を異にする人々が、それぞれの専門性を活かして役割を果たしていくという、協働の現場を本学部の学生が見ることは、本事業での実習の意義として重要なところである。このような経験は、学生にとって、卒業後に地域での協働を担う際には役に立つことだろう。

無人島体験によって、子どもたちは多くの経験をして帰ってくることが講義の中でも説明されていた。だが、学生は、参加者である子どもたちには見えない部分も学ぶこととなる。事業の意義や経緯、準備、個人や組織の役割等も理解した上で実習に臨むことで、学生にとっても多くの経験することとなり、今後の社会活動に生きてくることになると思われる。

（金子 佳寛）